

連理の枝

道南の小さな町松前町は、毎年春になると1万本以上もの桜が咲き競う「桜の里」として良く知られていますが、同町はまた、北海道で唯一の城下町でもあり、松前城は日本における最後の日本式城郭の一つといわれています。また、この城は、大半が焼失しており、築城当時から現存している建物は、本丸御門と本丸表御殿玄関、及び旧寺町御門（現在の阿吽寺の山門）のみとなっていますが、1961年に天守閣、2002年に搦手二の門、更に、2002年に天神坂門がそれぞれ再建されています。

この天神坂門の側の石垣の上に、樹齢80年余の桜があります。この桜は「南殿」と「染井吉野」という2種類の桜が一つの根を共有しているという非常に珍しいもので、まるで夫婦が、長い年月を共に支えあいながら風雪に耐えて生きてきたように見えることから、地域の人々は、その桜を「夫婦桜」と呼び愛し親しんできました（夫婦の手紙実行委員会編「恋するさくら」から）。

松前町では、この桜にちなんで、平成2008年から毎年「夫婦の手紙コンクール」を実施してきました。今年は4回目のコンクールとなりましたが、全国各地、遠くは外国から553通の応募があったといえます。その中から、町民104名の審査を得て、10通の恋文が最優秀賞、優秀賞、佳作などに選ばれています。また、松前町では、応募のあった550通余りの中から、入賞した恋文はじめ100通余りの恋文を選んで一冊の本「恋するさくら」にまとめて出版しています。

1通1通の手紙は決して長いものではありませんが、その手紙には、夫から妻へ、妻から夫へのいい尽くせぬ思い、愛情が溢れています。読んでいて目頭が熱くなる（年のせいで涙腺が弱くなっているせいではありません）手紙が沢山ありました。夫婦だけの、二人の間でしか分からない人生の歴史、他人では踏み込めない夫婦の絆というものが、行間の中にいっぱい詰まっているようです。

その中で、最優秀賞を受賞されたのは大阪市の高田 薫さんという63歳の女性でした。

この方は、癌になり、余命あと僅かであることを自覚しています。その彼女が夫に宛てて「公園のあの桜の古木は堅い蕾をいっぱい付けはじめました。毎晩、桜の傍らを通して帰ってくるあなた。私がいなくなったあと、暗い家に帰るのかと思うと、そのことがつらいのです。天国からパッと灯りをつけてあげたいな。(中略) お願いがあります。私の骨を一かけら、桜の根元に埋めてください。(中略) 大好きなあなた。幹が二股に分かれて寄りそっているような桜と一緒に、天国からあなたを見守っています。」という恋文を書きました。

自分の死を覚悟しながら一人残される夫を心配して止まない、妻の切なさが伝わってきます。

私は、この恋文を読みながら、ふと白居易による「長恨歌」の一節を思い出しました。「長恨歌」は、8世紀の唐の玄宗皇帝とその愛人楊貴妃との悲劇の恋物語ですが、その中に「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝（天に在りては、願わくば比翼の鳥となり、地にありては、願わくば連理の枝とならん。）」という一節が出てきます。これは、愛する二人が別れ別れになろうとする時交わした、誓いの言葉です。その意味するところは、自分たちが死んで後、「もしも天界に召されたら、羽が繋がった二匹の鳥となりましょう。もしも地上へ戻されたら、枝が繋がった二本の木になりましょう」というもので、次の世でも夫婦として生きていきたいという願いが込められています。

高田 薫さんは、今はどうしているのでしょうか。既に、天に召されて、愛する夫を天国から見守り続けているのでしょうか。

私は、あなたのお手紙を読みながら確信しています。愛し合うお二人は、きっと「連理の枝」となっているに違いないと。(塾頭 吉田 洋一)